

講義科目への導入に向けたサービslラーニングの振り返りと評価方法の改善 －社会福祉専門職教育関連科目における実践の分析－

Reflection and Evaluation which Encourage Service Learning in Lecture －Practice in Social Work Courses－

笠原 千絵*
Chie KASAHARA

抄録

専門教育科目の学びを深めるため、3年次必修科目「専門演習Ⅱ」、2年次必修科目「専門演習Ⅱ」、および3年次選択科目「社会福祉援助技術演習」の3つの演習科目で、サービslラーニングを導入した授業を実施した。本稿では、これらの実践を（1）振り返りの視点と方法、（2）評価方法の2点から批判的に考察し、講義科目への導入に向けた課題を検討した。

Abstract

The purpose of this study was to examine issues related to service learning for implementation of the curriculum especially in lectures. Based on experiences gained from three social work classes, the results from the viewpoints of reflection and evaluation were critically examined.

1. 研究目的

中央教育審議会による「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（平成20年12月24日第67回総会）では、大学のグローバル化、ユニバーサル段階をめぐる認識のもと、教育改善について様々な提言がなされた。例えば教育課程の体系化においては、生涯を通じた持続的な就業力育成を目指すキャリア教育、一方的な知識・技能の教授ではなく豊かな人間性や課題探求能力の育成、地域の実情に応じた大学間、地域の諸団体との連携、協同強化などである。

このような多様な要請に同時に応える教授法として、サービslラーニング（以下SL）が有効であると考えられる。SLとはアカデミックな教科の内容・スキルと、他者に対する貢献活動を統合する新たな方法であり、1990年代米国の教育改革を背景に法制化を伴い普及したとされる（倉本2008）。米国では高等教育の場でSLに参加した学生に有意に認められた学習効果として、職業選択の広がりや卒業後の地域貢献活動への関与（Warchel and Ruiz 2004）、学業成績、価

* 関西国際大学教育学部

値観，社会奉仕を志向する職業選択，卒業後の社会奉仕の継続の意志（Astin, Vogelgesang, Ikeda, et al. 2000）などが実証され，日本でも SL への関心は高まり，各大学でのサービスマニシングセンター等の設置や実践報告が増えている。なお，従来のボランティア学習や体験学習との違いは，意図的に設けた「振り返り」の構造にあるといえる（唐木2004，倉本2004）。

社会福祉専門教育においては，利用者理解や援助技術の実践的理解のため，地域活動やボランティア活動を積極的に導入・活用してきた蓄積がある。なかでも大学の正規科目・授業への導入に関する研究動向は以下 2 つに特徴をまとめることができる。第 1 は，演習科目への導入方法と課題に関する研究が多く，講義科目に関する研究が少ないことである。例えば演習科目では他者への貢献活動を通して自らの学習課題やボランティア活動の意義を考察させる「フィールド体験学習」（小田他2002）や「福祉ボランティア論」（藤田2005），専門実習に向けた援助技術の実践的理解の位置づけとして「社会福祉援助技術演習」（小松2005），「社会福祉援助技術現場実習指導」（高木2006，宮崎・廣瀬2006），専門知識の実践的理解とアカデミックスキルの習得に焦点をあてる「専門演習Ⅱ」（笠原2009）などがある。一方，講義科目では鳥海（2008）によるグループワークの理論と実際の理解に向けた「社会福祉援助技術論Ⅰ」のみである。

第 2 は，振り返りには話し合い，報告会，報告書作成，レポート等多様な方法を用いているが，授業内容と SL 活動を通して学ばせる振り返りの視点，および成績評価との関係が不明確なことである。例えば小松（2005），高木（2006），宮崎・廣瀬（2006）はいずれも社会福祉援助技術関連の演習科目に SL を導入するが，振り返りの視点は明確に示されていない。また，評価方法について述べているのは笠原（2009）に留まる。

そこで本研究はとりわけ講義科目への SL 導入に向け，筆者が2007年から取り組んでいる SL の事例を，「振り返りの視点と方法」および「評価方法」の 2 点から検討することを目的とする。鳥海（2008）は講義科目への SL 導入について，シラバスや時間割に反映されない週末や夏季休暇の利用がカリキュラム上の SL プログラムの位置づけを曖昧にさせたとして，社会福祉士養成の指定科目と絡めない導入教育としての SL の展開を課題として挙げる。しかし，社会福祉専門教育の領域では現在新旧カリキュラムが並行し，SL 活動を導入した演習科目の新たな開講は難しい。鳥海の提案にあわせ，指定科目，とりわけ講義科目にも SL を導入するため振り返りの視点を吟味することで，先の答申が求める「専攻する特定の学問分野における基本的な知識の体系的な理解」，「その知識体系の意味と自己の存在の歴史・社会・自然と関連付けた理解」にもつながるだろう。また同答申は，単位の実質化に向けて，学習時間の確保，シラバスの活用などを通じた成績評価の厳格化を求めている。SL を導入した授業においても評価との連動が課題となるだろう。

表 1 社会福祉専門教育における貢献活動を導入した授業に関する先行研究

	科目名称	活動目的	振り返りの視点	振り返り方法	評価方法
小田他 (2002)	フィールド体験学習	他者への関心と理解の深化，自らの関わりの客観的評価，学習課題の発見	目的，目標をふまえ，実施した体験実習，実習報告会などの学びについて	グループ討議，実習報告会，レポート	×
藤田 (2005)	福祉ボランティア論	福祉社会におけるボランティア活動の意義と役割と教育的意義の理解	活動に直結する振り返りは「活動紹介」。授業内容に合わせて適宜GW等	ポスターセッション，見学レポート，プレゼンテーション	×

小松 (2005)	社会福祉援助 技術演習	自己表現、自発性向上、 実習の事前学習	「心に残った」、「理解で きなかった」、「難し かった」こと、「これからの 課題や希望」、「その他」	報告書、学園祭での 展示、報告	×
高木 (2006)	社会福祉援助 技術現場実習 指導	福祉実践の現実に触れる、 コミュニケーション体験、 福祉実践の魅力と課題確 認、分野別の違い理解	×	×	×
宮崎・ 廣瀬 (2006)	社会福祉援助 技術現場実習 指導	①援助技術・知識、②保 健・医療・福祉統合化、 ③ジェネリックSWの視 点涵養に向けた地域福祉 の体験的理解	×	振り返りミーティン グ、実習記録ノート、 意見交換会	×
鳥海 (2008)	社会福祉援助 技術論Ⅰ	グループワークの理論と 実際の理解	「受容」、「葛藤」、「コミュ ニケーション」等講義内 容との接点	記録、活動直後・授 業のディスカッショ ン、レポート、実践 報告、定期試験	×
笠原 (2009)	専門演習Ⅱ	障害者の地域生活支援の 課題理解、卒論執筆に必 要な研究スキル	調査実施と卒論執筆／イ ンタビューと面接の共通 点、当事者と支援者の視 点の違い、地域課題	ディスカッション、 レポート	○

2. 方法

研究方法は、2007年度から2009年度春学期にかけて筆者が実施した、SLを導入した授業の分析であり、振り返りの視点と方法および評価方法に焦点をあて、講義科目への導入に向けた課題を明らかにする。以下ではまず、分析対象とする社会福祉専攻の3つの開講科目とSLのプログラム概要を整理する。なお、2007年度と2008年度の取組み詳細については笠原（2009）を参照されたい。

2007年度は、主にアカデミックスキルの習得を目的とする3年ゼミ「専門演習Ⅱ」で、2年間のプロジェクトとして始めた「障害児者の防災教育プログラムの開発」に取組んだ。活動先は障害者地域作業所であり、主に事前・事後学習を授業時間内、活動を課外活動として行った。卒業要件は必修、通年4単位の演習形式の科目である。

2008年度は、同じくアカデミックスキルの習得とキャリア教育を目的とする2年ゼミ「専門演習Ⅱ」で、このプロジェクトを含めた3つの活動のうち1つに参加することを課題の1つとした。SLの目的は2007年度と同様であり、活動プログラム、日程などは、プロジェクトに参加した6人の学生と相談しながら調整した。事前・事後学習、実際の活動ともに授業時間外に行った。卒業要件は必修、通年4単位の演習形式の科目である。

2009年度は、3年生の「社会福祉援助技術演習」で、学外のボランティア活動を演習の学びの視点から振り返ることに取り組んだ。活動先は事前に説明して理解を得られた、大学近隣の福祉施設・機関の中から学生が選ぶ方式で、学期中任意の3日、計24時間以上の活動を最低条件とした。卒業要件は選択、ただし社会福祉士の受験資格取得の指定科目であり、半期2単位の演習科目である。

表 2 サービスラーニングを導入した授業の概要

	2007年	2008年	2009年
科目名	専門演習Ⅱ	専門演習Ⅱ	社会福祉援助技術演習
卒業要件	必修	必修	選択（ただし社会福祉士指定科目）
履修学年	3 年	2 年	3 年
単位数	通年 4 単位	通年4単位	春学期 2 単位
授業形態	演習	演習	演習
履修人数	11人（筆者のゼミ選択者）	6 人（プログラム①の選択者）	26人
SL の目的	SL 活動と調査・卒論執筆過程の共通点，地域生活支援の課題理解	SL 活動と調査・卒論執筆過程の共通点，地域生活支援の課題理解	社会福祉援助技術の理解
活動内容（プログラム）	障害児・者の防災教育プログラムの開発	①障害児・者の防災教育プログラムの開発，②カンボジアでのワークキャンプ，③任意ボランティア活動からの選択	自由
活動協力機関	障害者地域作業所	障害者地域作業所	SL の理解・協力を得た複数施設・機関から選択
授業外の活動回数，時間	4 回，計20時間（事前事後学習，準備含まず）	合同 3 回，個別 3 回以上，計23時間（事前事後学習，準備含まず）	学期中任意の 3 日，計24時間以上

3. 結果

3.1 振り返りの視点と方法

2007年度の「専門演習Ⅱ」では，防災教育プログラム開発のための活動ごとに，振り返りの視点を説明した。例えば文献研究では災害時要援護者の災害リスクの相違点比較と課題の一般化，防災センターでの避難訓練では障害特性とコミュニケーション技法の理解，利用者と職員へのインタビューではそれぞれの視点の比較やソーシャルワークの面接技術との共通点理解などである。活動直後の話し合いでは，比較的手軽に素早く振り返ることができ，また，大学祭と活動先の秋祭りでのグループ中間発表は，学びの内容をある程度形にすることができた。いずれもグループでの振り返りのみだった。

2008年度の「専門演習Ⅱ」では，話し合いと発表に加え「書く」振り返り，すなわちレポートを導入した。振り返りの視点は2007年度同様活動ごとに説明したが，レポート課題は「活動から学んだこと」という大まかなものであり，提出も自由とした。その結果，各自の観点や書き方が異なり，提出者も半数に留まった。これらを受け，とりわけ専門科目（社会福祉士指定科目）への SL 導入では，振り返り方法の工夫に加え，視点を学習内容とより明確に関連付ける必要があると考えた。

そこで2009年度の「社会福祉援助技術演習」ではまず，学習目標に沿った振り返りレポートの課題をシラバスに明記した（例1）。具体的には，ボランティア活動を通して学んだ施設や利用者の特徴と，授業の演習を通して得た「自己覚知」をふまえ，実習を希望する施設・機関でとりわけ重視すべきと考える社会福祉の「価値」と「援助技術」の概要とその理由，具体的な学習方

法を考察するというものである。また、振り返りの視点と達成度を文章化した「ループリック」を作成し、学期当初にレポート課題を記載したシラバスとあわせて受講生に配布し、受講期間を通して確認できるようにした。以上、SL 導入科目の振り返りの視点と方法についてまとめたのが表 3 である。

例 1：2009 年春学期社会福祉援助技術演習シラバスに示したレポート課題

- ・レポート課題「実習までに学習が必要な社会福祉の価値と援助技術」
- ・実習施設・機関の希望領域を絞り込み、上記ボランティア活動を通して学んだ施設・機関・利用者の特徴とニーズおよび、演習を通して得た「自己覚知」をふまえ、以下 3 点を必ず述べること
 - ①とりわけ重視すべきと考える「価値」の概要とその理由
 - ②とりわけ必要と考える「援助技術」の概要とその理由
 - ③具体的な学習方法

表 3 SL 導入科目の振り返りの視点と方法

	2007年	2008年	2009年
科目名	専門演習Ⅱ	専門演習Ⅱ	社会福祉援助技術演習
振り返りの視点	プログラムごとに設定（例：文献研究と課題の発見、障害特性とコミュニケーション技法、分かりやすい説明、当事者と支援者の視点の比較、データ収集とまとめ方等）	プログラムごとに設定（障害特性とコミュニケーション技法、地域生活支援の課題、家族支援、グループワークの進行、データ収集とまとめ方等）	SL 体験をふまえ、想定する実習先でとりわけ重視すべき「価値」、 「援助技術」の概要とその理由
振り返りの方法	話し合い、発表	話し合い、発表、レポート（自由）	話し合い、レポート

レポート課題、すなわち振り返りの視点を事前に示すことで、受講生は自分なりに考察を深めようと努めた。表 4 は受講生がレポートのトピックに選んだ社会福祉の「価値」と「援助技術」の一覧である。社会福祉援助技術は多岐にわたるものであるが、学生が選択したトピックはコミュニケーションを中心とする個別援助技術に偏り、トピックが不明確なものも提出者 23 人の 3 割程度みられるという結果だった。

表 4 社会福祉援助技術レポートトピック例

重要と考える…	レポートトピック例	トピックあいまい
価値	自己決定（9）、個別化（3）、自立支援（2）、エンパワメント、自己実現、人間の尊重、利用者主体、バイスチックの 7 原則、受容（各 1）	（7）
援助技術	コミュニケーション（7）、傾聴（4）、信頼関係構築（3）、受容（2）、個別支援、自立支援、他職種との交渉、説明、経験拡大の機会設定、家族との関係修復（各 1）	（8）

（単位：人、履修者 26 人中 23 人提出、複数回答含む）

3.2 評価方法

次はこれらをどう評価するかという SL の評価方法であり、いずれの科目でも成績評価と連動

させた。まず2007年度の「専門演習Ⅱ」は、評価対象を活動への参加回数とし、配点は全体100に対し、SL 活動 1 回 5 点× 6 回=30%とシラバスに示した。しかし活動への参加回数を評価対象としたものの、実際は活動により参加者が極端に少なく計画変更せざるを得なかった。また活動ごとに振り返りをしたが、グループの話し合いや発表から個人の学びを評価することは難しく、結局何を評価するかがあいまいになってしまった。

2008年度の「専門演習Ⅱ」は、評価対象を事前準備や事後活動も含めた参加協力と最終レポートとし、配点は全体100に対し、参加協力20%と最終レポート15%とした。しかし、シラバスに示したのは評価対象と配点のみで、これらの評価対象が SL とどのように関係しているかは明確に示さなかった。また、活動を 3 種類から選べるようにしたが、活動により参加状況や課題提出者数が異なり、SL の評価は再度あいまいになってしまった。

そこで、2009年度の「社会福祉援助技術演習」は、SL の活動そのものではなく学びの内容を評価する工夫として、まず評価対象を、毎回の演習授業で使う振り返りの記入用紙であるワークシートとレポートとした。次に、先に示した例 1 のように SL とレポート課題の関係を示したうえで、表 5 のようにシラバスにワークシートとレポートの配点を明記した。また、SL の評価視点を含めたルーブリックを作成し、シラバスと併せて学期当初に受講生に配布した。そして、受講生が SL の主旨や学習の視点、成績評価との関係を理解できるように繰り返し説明した。以上、SL 導入科目の評価配点をまとめたのが表 5 である。

表 5 SL 導入科目のシラバスに示した評価配点

	2007年	2008年	2009年
科目名	専門演習Ⅱ	専門演習Ⅱ	社会福祉援助技術演習
評価配点	<ul style="list-style-type: none"> 出席 30% (欠席 1 回につき 1 点減点) 各活動への参加 5 点× 6 回=30% 最終レポート 40% 	<ul style="list-style-type: none"> 提出物 5 点× 7 回=35% 中間及び最終レポート 15点× 2 回=30% 学習ファイル 15% 参加協力 20% 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 5 点×20回=100点, 40% 自己管理シート提出 50点× 2 回=100点, 10% ファイル提出 50点× 2 回=100点, 10% レポート 100点, 40%
ルーブリック提示	なし	なし	あり

* 太字はSLの評価に関する項目

ルーブリックは、形式面 4 項目と内容面 3 項目の計 7 つの学習目標と、ABC 3 段階の達成度をかけあわせた表である。形式面の項目は 1 「誤字、脱字がない」、2 「文法上の誤りがない」、3 「文章の量が十分である」、4 「講義、コメントおよびグループの他のメンバーの意見等のメモをとっている」、内容面の項目は 5 「自分自身に向き合った振り返りができている」、6 「演習の意図に照らし合わせた振り返りができている」、7 「ボランティア体験に照らし合わせ、具体的な援助場面に照らし合わせた振り返りができている」である。21の各セルには各項目の達成基準を文章で記述し、全体を100点とした場合の各評価項目の配点を示している。例えば内容面で SL に関する項目は、配点20点の上記 7 であり、A 段階「ボランティア体験に照らし合わせ、支援者としての自分、社会福祉機関や利用者の状況を具体的に考察している」、B 段階「自分なりに社会福祉機関や利用者の状況を考察しているが、具体性に欠ける」、C 段階「学びを深めるた

めの体験をしていない」とした。

毎回のワークシートは ABC で評価し、学生に特に注意や考察を促したい項目の番号、例えば誤字脱字なら「1 要注意」、体験からの考察であれば「7 具体例を」というように簡単なコメントをワークシートに直接記入して返却した。レポートの評価にはルーブリックを 1 人 1 枚ずつ使い、各項目につき該当する基準 ABC の部分に印をつけ、必要に応じてコメントを記入した。そして、各項目の合計点数を算出し、レポートに採点済みのルーブリックをつけて返却した。なお、2007年度と2008年度の反省をふまえ、2009年度は評価がぶれないようルーブリックを厳格に適用するように努めた。その結果、学生による授業評価では、「この授業の評価基準については明確な説明がなされていた」という項目は、5 段階中 4.14（全学平均 3.71）であった。

4. 考察

3 年間の試行錯誤で明らかになったことは、授業の計画から成績評価にいたるまで一貫性を保った取組みの重要性である。Haward (2001) は、サービスマーケティングを成功させる 10 の原則（改訂版）に「単位はサービスでなく学びに付与すること」、「学問としての厳格さに妥協しないこと」、「学習目的を明確に定めること」といった項目を挙げる。2007年度と2008年度の「専門演習Ⅱ」の取組みではこの点の理解が不十分だったため、振り返りと評価にあいまいさが残ったといえる。また、教授内容を比較的自由に決められるゼミと、内容が標準化された資格関連の専門科目では、SL の目的、位置づけ、方法などが変わってくる。全米各地の大学における SL 活動を牽引する Campus Compact のウェブサイトでは、教員は SL 導入前に SL のモデルを検討するべきとしている。例えば本研究で示した取組みは、2007年度と2008年度の「専門演習Ⅱ」は「アクションリサーチ型 SL」、2009年度の「社会福祉援助技術演習」は「学問分野ベース型 SL」に該当すると考えられる。SL の目標とモデルを事前に明確化し学生にも示しておくことで、目標と活動に一貫性をもたせることができるだろう。以下では、講義科目への SL 導入に向けた振り返りと評価の課題について述べる。

第 1 は、講義内容と振り返りの視点の関連を明確にすることである。「社会福祉援助技術演習」のレポートでは学生に「実習先でとりわけ必要な援助技術の価値と技術」を自由に選ばせたところ、トピック選択と考察の深さにばらつきがみられた。実習希望分野の絞込みと事前学習のため、トピック選択は学生に任せるという意図であったが、漠然とした課題のため、学生には伝わりにくかったと考えられる。

そこで、2009年度秋学期開講中の講義科目「障害者福祉論」シラバスには、より具体的なレポート課題を記載し初回の授業で配布した。例えば障害者福祉論をはじめとする講義科目には、制度の理解と活用という内容があるが、多くの学生にとってこれらの理解は難しく、テスト前に丸暗記しても知識として定着しにくいという課題がある。そこで、制度やサービスが実際どのように活用されているのか、いないのか等、SL 活動内容と講義内容を関連させるヒントをあらかじめ示す工夫をしたのである（例 2）。課題提示の際には、前年度同科目で多くの学生が習得困難だったトピックを新たに組み込むことも考えられる。一方、課題を明確にすることで、学生は書かれたことしかやらないという危険性も残るため、十分な吟味が必要である。

例 2：2009年度秋学期障害者福祉論シラバスに示したレポート課題

- ・テーマ「障害者の地域生活とコミュニティの役割」
- ・このテーマをふまえていれば、タイトルは自由につけてよい
- ・上記サービスラーニング活動を通して授業で学んだことを考察する
- ・（ヒント）授業では主に障害者福祉の制度について学ぶ。制度を使いながらの地域生活の実際とはどのようなものか？障害者自立支援法に基づくサービスはどのように活用されているのか/いないのか？その理由は？サービスだけあれば地域生活は成立するのか？地域や地域住民には何が期待されるのか？課題は？解決方法は？他の領域との共通点は？

第 2 に、複数の方法による振り返りという工夫が考えられる。例えば「アクションリサーチ型」で行った「専門演習Ⅱ」の SL には、唐木（2004）の指摘する「話す」、「書く」に加え「為す」という振り返りを取り入れることになったが、「理論的学習者」に特に有効とされる「読む」という方法は決定的に不足していた。とりわけ講義科目で必要となる「知識面での水準」の向上には、活動の前後に、教科書の中でも特に学ばせたい部分を意識的に読ませるといった工夫や、レポートに使う参考文献の指定などが考えられる。また逆に、受動的になりやすい講義科目ではアクティブラーニングの観点から「話す」振り返りの機会を設定することも有効だろう。その際、話しあいによる振り返りの実施予定日をシラバスに示しておくことと活動の期限を示すことにもなり、動機付けと学びの視点の意識という一石二鳥の効果が期待できる。

第 3 に振り返りと成績評価を連動させる配点の工夫が考えられる。SL 活動への参加を促すなら、参加しないと評価が低くなるような課題、例えば振り返りレポートや、定期テストのなかでも知識を応用する記述問題などを設定し、かつ配点を高くする方法が考えられる。逆に参加を学生の自主性に任せるなら、参加を前提にしない課題、例えば知識の定着度を確認する定期テストの配点を高く、参加を前提にする課題の配点を低くする方法が考えられる。

これらの課題をクリアする必要はあるが、SL は使い方によっては講義科目での学びを深めるためにも有効な教育手法となるだろう。

参考文献

- Astin, A.W, Vogelgesang, L.J, Ikeda, E.K. et al. (2000) *How Service Learning Affects Students*, Higher Education Research Institute, University of California.
- Campus Compact (2002) *Essential Service-Learning Resources Brochure*, <http://www.compact.org/resource/SLres-definitions.html> (2006.8)
- 藤田久美（2005）「福祉専門職養成課程におけるボランティア教育の位置づけと課題：山口県立大学社会福祉学部における取組みから」、山口県立大学社会福祉学部紀要、第11号、pp55－69.
- Howard, J (2001) *Service-Learning Course Design Workbook*, Michigan Journal of Community Service Learning, Summer 2001, Companion Volume, OCSL PRESS, The University of Michigan.
- 唐木清志（2004）「サービス・ラーニングにおける『リフレクション』の理論と方法：『サービス・ラーニングにおけるリフレクションのための実践者ガイド』を事例として」、『公民教育研究』, vol.12, 1－16.
- 笠原千絵（2009）「サービスラーニングの導入に向けた『障害児者の防災教育プログラム開発プロジェクト』の試みと『学習成果』、『振り返り』と『参加の質』の観点からの批判的考察、教育総合研究叢書、2、pp95－106.

- 小松啓（2005）「社会福祉援助技術演習における学生参加型授業の実践」, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 6, pp149-155.
- 倉本哲男（2004）「サービsl・ラーニングの授業構成因子に関する研究：リフレクシヨnとの関係性に注目して」, 『教育方法学研究』, 第30巻, 59-70.
- 倉本哲男（2008）「アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究：サービslラーニングの視点から」, ふくろう出版.
- 宮崎まさ江・廣瀬豊（2006）「社会福祉実習における導入教育の取組みと今後の課題：現場体験実習『自治体実習』の試みから」, 長野大学紀要, 第28巻第1号, pp73-88.
- 小田心火, 大塚真理子, 朝日雅也他（2002）「課題レポートの分析による『フィールド体験学習』の学び」, 埼玉県立大学紀要, 4, pp27-34.
- Suskie,L（2004） *Assessing Student Learning*, Anker
- 高木寛之（2006）「社会福祉士養成課程における福祉体験学習の現状と課題」, 人間関係学部紀要, 8, pp163-170.
- 鳥海直美（2008）「ソーシャルワーク教育におけるサービslラーニングの導入と実践：大学とNPOの協働による障害児の余暇活動支援を通して」, 千里金蘭大学紀要, 5, pp25-33.
- Warchal,J.and Ruiz, A（2004） *The Long-Term Effects of Undergraduate Service-Learning Programs on Postgraduate Employment Choices, Community Engagement, and Civic Leadership*, Welch. and Billig,S.H.eds（2004） *New Perspectives in Service-Learning: Research to Advance the Field*, Information Age Publishing.